



Title	ウィトゲンシュタインと行動主義
Author(s)	中谷, 隆雄
Citation	メタフュシカ. 1999, 30, p. 127-139
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66623
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ウイートゲンシュタインと行動主義

中 谷 隆 雄

一 行動主義

く、行動を介して間接的に探究することになる。このタイプの行動主義は、効率的に科学的成果を得るために方法論であつて、哲学的な見解ではない。

小論で考察してみたいのは二点である。ウイートゲンシュタインは行動主義に同意しないが、それはどういう理由によるのか、というのが第一点。そして、彼は行動主義に反対しながら、行動主義が批判した心身二元論に舞い戻らなかつたが、そのことはどうして可能だったのか、というのが第二点である。

③ 論理的行動主義というのは、心的事象についての言明は行動傾向についての言明に還元できるという主張である。

小論では、考察をウイートゲンシュタインと形而上学的行動主義の関係に絞りたい。なぜなら、彼が自らの思想を練り上げる際に意識していたのは、概して、形而上学的行動主義であつたように思えるからである。そこで、以下、「行動主義」で形而上学的行動主義のみを意味することにする。

① 方法論的行動主義というのは、心的事象は相互主観的に到達不能であるという仮説に基づく科学方法論である。この方法論に従えば、心理学の仕事は心的事象を、直接的にではな

二 内的と外的

問題にしているだけで、二分法そのものを問題にしていない」
(Glock 175)。

行動主義は、人間に生じる事象について、外的なものの実在は認めるが、内的なもの実在を認めない。そして外的なものは行動であり、内的なものとは心的事象である。つまり、行動主義は、行動の実在のみを認め、心的事象の実在を認めない。誰がこういう行動主義を支持していたかはここでは問題にはしない。また小論にはそれを論じる用意もない。考えてみたいのは、ウイトゲンシュタインがこういう行動主義を意識していたと仮定すれば、彼の言説がよりよく理解できるのではないかといふことである。

ウイトゲンシュタインは行動主義に同意しない。しかしその理由は、心的事象の実在が認められるということではない。心的事象の実在については、彼は認めてもいないし、また否定してもいな⁽¹⁾ (PU 308)。彼が行動主義に同意しないのは、簡単に言えば、行動主義と概念枠組みを共有しないからである。

行動主義の概念枠組みといふのは、ある種の二分法のことである。この二分法は、心身二元論に由来する。心身二元論は、存在を外的の存在たる身体的事象と内的存在たる心的事象に峻別していた。そして心身二元論に対する批判の結果、一方で観念論や現象論が生まれ、他方で行動主義や物質論が生まれた。しかし、これらの立場はいずれも、「内的—外的」の区分の一方を

ウイトゲンシュタインによれば、「内的—外的」という二分法は比喩にすぎない。例えば、「痛みがある」と、「痛みなしに痛みをよそおう」との間に、「内的な区別がある」と言われることがある。そのように言われるときの「内的」は、比喩であつて、しかも「危険な比喩」である (BP1-824)。「内的」という表現がなぜ「危険」なのか。

「内的—外的」というのは、元来、空間的な概念であった。もちろん、空間的な「内的—外的」が人間に生じる事象に比喩的に使用されてよい。しかし、彼によれば、「内的—外的」の比喩的な使用から次のように考えられてしまうのが「危険」なのである。つまり、私と他人の間には「障壁」が存在し、「障壁」を隔てて私側が「内」であり、他人側が「外」である。そして、個々人は自分自身の心に対しても特権的に到達できるが、他人の心に対しても到達できない、と。だが、そのように考える根拠はない。

たしかに、私は私の考えを隠す」とができる。そして、私の考えが隠されうるという事実から、私の特権的な内的世界の存在が正当化されると考えられるかも知れない。しかし、「もし私が話して、そして他のすべての者が聴であつたとすれば」、私の考えは隠されているのではないか (BP1-574)。あるいは、

もし私がフランス語を話して、周囲の者がフランス語を理解しないければ、私の考えは隠されているのではないか。⁽²⁾だからといって、そのような場合、乗り越え不能な「障壁」によって私の内的世界が形成されて「いる」と考えられる」とはない。

それでも、私が私の考えについて完全に黙して語らなければどうか。このような事態は事情が異なると考えられるかもしれない。つまり、もし私の考えがまったく表明されないとすれば、そこには乗り越え不能な「障壁」があると考えられるかもしれない。この事態は(a)(b)の二つのケースに分けることができる。

(a) 私は、私の考えを表明する」とが可能だけれども、あえてそれを隠している。

(b) 私は、私の考えを表明する」とがまったく不可能である。

(a)については問題ない。私が私の考えを表明する」とが可能であるとするなら、「障壁」を乗り越える」とも可能であり、他人は私の考えに到達可能である。また、表明される前の考えは、表明された考え方以上のものだったわけでもない。なぜなら、「私がある人に私が考えている」とを言うとすれば、そのとき、私は、私の考えについて、私の言葉が記述する以上の「」とを知つて」はいなからである(BP1-576)。問題は(b)である。

(b)の場合、私は、「単にそれを見つける」とがないという仕方ではなく、そもそも見つける」ということが考えられないといふ仕方で隠すこと」ができる」と考えてよい(BP2-586)。」のようないい隠し方をウイートゲンシュタインは「形而上学的隠匿」と呼ぶ(ibid.)。

「形而上学的隠匿」が成り立つて「いる」とすれば、「内的」世界は当人にとつてのみ特權的に到達可能な世界でなくではない。しかし私が知らず知らずに自分の内部の事象を洩らすしるしを発する」というのはあり得る」とではないか。あるいは、そのとき私は、それはけつして私の内部の事象をもらしたしるしではないと言いたくなるかもしれない。しかし、私は自分の内部で起こったことを忘れてしまつて「いた」といふ」とも、ありえないことではない(ibid.)。そのようないい」とがあり、内的世界はもはや当人にとつてのみ特權的に到達可能な世界とは言えない。

もし外側に顯れえない内的な心的事象が存在するとすれば、それは外的な心的事象と本質的に異なつたものではなくてはならない。そのことは説明可能であろうか。少なくとも、告白によつてそのことを説明する」とはできない(BP2-703)。「ハ」して説明できないのか。

かりに告白によつて「おひだく内的なみの Innenstes」(ibid.)について語られたとしよう。その告白が内的事象の独自性を説

明しているところがあるためには、告白を信用しなくてはならない。なぜなら、告白の通りの内的事象が存在するかどうかは、他人には確かめようがないからである。しかし、そのようにして内的事象について語られたとしても、外的事象との本質的なちがいが説明されたことにはならない。なぜなら、その告白は、言語の誤用に基づいていたのかもしないし、思い込みに基づいていたのかもしないし、うそであったのかもしないからである。これらの可能性のいずれについても、否定する」とはできない。⁽⁴⁾このような告白による「説明」には、正しいものも誤ったものもない。当人が正しい「説明」だと思ってくるものが正しい説明になる。このような「説明」はもはや説明とは言えない。それゆえ、告白によって「形而上学的隠匿」を説明するにはできない。

このように、「内的—外的」という比喩には、説明の及ばない「形而上学的隠匿」に陥る危険がともなう。それでも、ウイトゲンシュタインは、内的なものについて語らざるをえないと示唆している。例えば、他人を信頼していないときには、「私は彼のうちに生じてはいる」と知らない」と囁いたくなる (BP2-602/3)。なぜなら、その「ふるまじ」(Bemehmen) が予測不可能だからである (BP2-663/4)。ふるまじが予測不可能だと、なぜ内的世界について語らなくなるのか。人間ではなく、機械を考えてみればよい。ある機械が予測できない動きをすると仮定してみる。そのとき、私たちは機械の内部について語りたくなるのではないか。しかしその機械のメカニズムを完全に知つてしまえば、そのような内的世界について語る必要はなくなる (BP2-665)。他方、人間の「メカニズムを調べる」とはできないと想定されてくる (BP2-666)。それゆえに、人間は内的世界について語らざるもの。もちろん、彼にとっては、内的世界は、実在ではなく、「文法的フィクション」 (PU 307) である。つまり、彼にとっては、人間の内的世界というのではなく、あくまで語り方の便宜の問題にすぎず、存在論の問題ではない。このようにウィトゲンシュタインは「内的—外的」の区分を全面的に拒むわけではないが、行動主義が依拠する概念枠組みとしての「内的—外的」は斥ける。⁽⁵⁾

以上が行動主義に対する内在的批判と呼べるなら、これとは別に、ウィトゲンシュタインのテキストから、外在的批判も読み取れる。なぜなら、概念枠組みの問題は描いても、彼は、行動主義ではうまくいかないと考えているように思えるからである。彼は言ふ。

「『しかし、それでも、痛みを伴つた「痛みふるまい Schmerzbemehmen」と痛みを伴わない「痛みふるまじ」のあいだにちがいがある』ことを君は認めるだろう。」——認めるだつて？ それ以上のちがいがあるだらうか。」 (PU 304)

いかなる形の行動主義であれ、それが行動主義であるかぎり、「痛みを伴つた〈痛みふるまい〉」と痛みを伴わない〈痛みふるまい〉」という事実に対処できない。たしかに「痛みを伴つた〈痛みふるまい〉」と「痛みを伴わない〈痛みふるまい〉」があるまい方において異なる」ともありうる。その場合は、行動主義でも両者を区別できる。しかし、両者がそのふるまい方においてまったく異なる」ともありうる。例えば、実生活における「痛みを伴つた〈痛みふるまい〉」と芝居における「痛みを伴わない〈痛みふるまい〉」があるまい方においてまったく異なるかもしだれない。そのような場合、行動主義では区別がつかない。それゆえ、ウイートゲンシュタインは行動主義に与するわけにはいかない。だからといって、彼は心身二元論にも戻らない（その理由は第四節で簡単に触れる）。ならば、彼はいかなる道を歩むのか。それが次節以降の課題である。

三 指示対象

ウイートゲンシュタインの場合、心的用語は何を指示するのか。心的用語が單に行動を指示するのであれば、彼は行動主義者になる。心的用語が行動の背後に心的事象を指示するのであれば、彼は心身二元論に逆戻りする。彼によれば、心的用語は何も指示しない。「『喜び』はまったく何も指示し (bezeichnet)

ない。内的なものも、外的なものも」指示しない (ZL 487, Koethe 115)。彼の立場は、存在論的に心的事象に関与しないたぐものなのである。

「痛み」についても、そのことは言える。痛みは指示可能だと考えられるかもしれないが、指示できるのは、痛みの場所であって、痛みではない。「痛み」の言語ゲームの成立過程を考慮してみると、「痛み」が何を指示するかという問題すら成り立たないことがわかる。例えば、子供がけがをして、泣く。そして大人が子供に最初は叫びを、のちに文を教えるとしよう。

「だから、『痛み』という語は元来泣く」とを意味していると君は言うのか」——反対である。痛みの語表現は泣く」との代わりをしているのであって、泣く」とを記述しているのではない。 (PU 244)

つまり、「私は痛みを有する Ich habe Schmerzen」⁽⁷⁾は、泣く」との代わりをしているのであって、泣く」とを記述しているのではない。それは、泣く」との代用物であるかぎり、およそ何も記述していない。それゆえ、「私は痛みを有する」の「痛み」は、行動を指示する」ともなければ、内的対象を指示する」ともない。ただ、この説明は一人称についてしか言えない。「私は痛みを有する」は、一人称言明であるゆえに、叫びとか呻き

の代用物なのである。そしてそれゆえに、「痛み」は何も指示しない。

ウイトゲン・シュタインは、泣く、しゃべる、叫ぶの代わりをする言明を表白 (*Außerung*) と呼ぶ (BP 9-63, 177)。つまり、一人称の心理言明「私は痛みを有する」は表白と称される。しかし、「一人称心理言明は表白としてのみ使用されるわけではない」。

一人称心理言明は、表白のみならず、記述にも報告にもならず。たしかに、「私は恐い」という「叫びは記述ではな」 (PU9-189, 9-187/9)。しかし、「移行としてのものがあり」、「私は恐い」という言葉は、叫びに近いものである」といふ、叫びから遠いものである」といふ可能である (ibid.)。また、「私は痛みを有する」という言葉は、叫びでもありうる」何か他のものでもありうる (ibid., Glock 52)。要するに、一人称心理言明は、記述として使用するのも可能なのである。

一人称心理言明は、表白であり、叫びの代わりをするといふのがウイトゲン・シュタインの主張であった。それが記述にゐるところのはじめ、「私は痛みを有する」とか。話を一人称に限つても、表白の「痛み」と記述の「痛み」は意味がちがつてないか。そして「痛み」という語は、記述的に使用されるときには、感覚を指示しているのではないか。しかし彼は語る。

原初的な〈痛みするまい〉は〈感覚するまい〉である。それ

は言語表現に取つて代わられる。「『痛み』といふ語は感覚を表してゐる」といふのは、おおよそ、「私は痛みを有する」は感覚表白である」といふことを意味する (BP1-313)

「『痛み』といふ語は感覚を表してゐる」といふのは記述的用法のいふのである。だとすれば、いのちの趣旨は、「私は痛みを有する」は感覚表白である」といふ原則は記述の場合も維持されるべきだとじつじつではないか。もしそう解釈できるならば、表白と記述のちがいは、次のよつた等式で対照できぬよつてと思える (Hacker 408)。

〔表白〕 「私は痛みを有する」 = 「私は痛みを有する」
〔記述〕 「私は痛みを有する」 = 「私は『私は痛みを有する』と声を発するよつたな状況に置かれてゐる」

この等式を説明するには、一对の概念が便利である。ウイトゲン・シュタインには表層文法 (Oberflächengrammatik) と深層文法 (Tiefengrammatik) といふ一对の概念がある。語の表層文法といふのは、「文形成におけるその語の用法」のいとであり、その語の用法のうちで、「耳で把握する」といふ部分」であ

文法の性格から推して、その語の用法のうちで耳で聞いただけでは簡単に把握できない部分が深層文法になるであろう。

両概念を使って言えば、表白としての「私は痛みを有する」と記述としての「私は痛みを有する」は、表層文法は類似しているが、深層文法が異なるということになる。右の等式で言えば、上の辺が表層文法であり、下の辺が深層文法である。そして、この等式を認めれば、表白の「痛み」と記述の「痛み」の意味の異同を考えなくて済むのではないか。なぜなら、深層文法のレベルでは、表白の場合は無論のこと、記述の場合も、「私は痛みを有する」は表白にとどまるからである。

この論点を明確にするために、「私は痛みを有する」の代わりに、表白らしい表現「イタイイタイ」で考えてみよう。そうすると、表白と一人称記述とのちがいは左のように表されるだろう。表白としては使用されない三人称言明「彼は痛みを有する」も、一人称記述と同型のものとして処理できる。

はイタイイタイと表白する状況に置かれている」ということになる。ただ、「イタイイタイと表白する状況」とはどういうことか。とりわけ、「状況」とはどういうことか。「歯ガイタイ」という表白を例に、そのことを見ておきたい。ウイトゲンシュタインに従えば、表白というものはある種の呻きの代わりである。ただ、呻きというものはそれだけで存在するわけではない。歯が痛くて呻く際には、頬を押さえるかもしれない。そして頬を押さえるにしても、食事が目の前に用意されているときに頬を押さえて食べないのかもしれないし、玩具を前に頬を押さえて遊ばないのかもしれない。このたぐいの諸例が、歯が痛くて呻くときの「状況」である。

その呻きの代わりをするのが、「歯ガイタイ」という表白である。それゆえ、呻くときの状況は、「歯ガイタイ」という表白がなされるときの状況でもある。そして、「歯ガイタイ」と表白される状況には、頬を押さえるようなるまいのみならず、そのふるまいに伴う諸条件、さらにはそのコンテキストも含まれるであろう。「歯ガイタイ」と表白するときには、その種の状況下に置かれているのである。

ところで、先の等式を「」に適用すれば、記述の「彼（あるいは私）はイタイイタイです」の意味は、「彼（あるいは私）

「」で、記述される場合を考えてみよう。彼は自分で「歯ガイタイ」と記述される場合を考えてみよう。彼は自分で「歯ガイタイ」と

表白しているかもしれないし、表白していないかもしれない。しかしいずれにしても、彼は「歯ガイタイ」と表白するような状況に置かれている。そして、(c)によつて記述される事態が成り立つているとき、その事態は(d)によつて記述されることが可能であり、しかも記述(c)には記述(d)以上のことは含まれていないのでないか。

(c) 「彼は歯に痛みを有する」
(d) 「彼は歯ガイタイと表白する状況に置かれている」

もし記述(c)が記述(d)に置き換えられるとすれば、「彼は歯に痛みを有する」の「痛み」は心的事象を指示する必要もないし、行動を指示する必要もないであろう。少なくともワイトゲンシユタインにとつてはその必要はない。それは「実在的精神」のゆえである。⁽⁸⁾

四 実在的精神

痛みのともなう〈痛みあるまい〉と痛みをともなわない〈痛みあるまい〉のちがいを、心身二元論者も、そして行動主義者も、「痛み」という語の指示対象の有無によつて説明しようとする。つまり、両者は心的事象が真正か否かを心的用語の指示

対象の有無によつて説明しようとする。心的事象が真正であることを示す指示対象とは、心身二元論者にとつては、(形而上学的に) 内的世界に隠匿されたものであるうし、行動主義にとつては、あるまいであろう。しかし心身二元論にも行動主義にも与しないワイトゲンシュタインは、心的事象が真正か否かという問題にどのように対処するのか。

ワイトゲンシュタインによれば、「私は、彼が何らかの(真正の)心的事象を有していると信じている」というのは、「意見」とか「説」を表す言明ではなく、私が彼の「魂に対する」何らかの「態度」を有する」とによつてはじめて意味をもつ言明である (PU4.178, 420)。心身二元論や行動主義が斥けられても、それらに代わる「説」は必要とされない。必要とされるのは、「説」とか「意見」ではなく、「態度」である。この「態度」というのは、ダイヤモンドが「実在論的精神 realistic spirit」と呼ぶものである (Diamond 44)。

ダイヤモンドの話は『数学の哲学』に由来する。ワイトゲン・シユタインは『数学の哲学』で、「哲学において経験論ではなくても、しかも実在論である」と、「これこそ最も困難な」とだ」と言つっている (GM6.23)。そしてこれは、F・P・ラムゼイに向けられている。ラムゼイは、経験論を探らずに実在論であろうとしているが、それは成功していないとワイトゲンシュタインは言いたいのである。このコメントは数学についてのもので

あるが、ダイヤモンドは、それをウイートゲンシュタインの一般的な哲学的見解とみなす (Diamond 39)。ダイヤモンドによれば、「哲学において経験論ではないしかも実在論である」といふが、「あわめて困難」なのは、fantasy に惑わされるからである (42)。そして fantasy に惑わされるのは、形而上学的な要求があるからである (20)。fantasy によつては、ウイートゲンシュタイン自身の記述では、「巡回つかの歴車」 (UW 429, PU 271) に相当する (45)。

ルームの『探究』は『論考』の形而上学的要求を克服しよべしである (20)。ルームの引用文は、『数学の基礎』のうちでも『探究』と同時期のものとされつゝある。それゆえ、引用文中の「実在論」は形而上学的なものでないと理解すべきであろう。ルーム、ダイヤモンドはの「実在論」を「実在的 精神」と呼ぶ。

「実在的 精神」は、バークリーの『ハイラスとフィロナスの二つの対話』に、分かりやすい形で見られる (47)。この対話は、物質論者ハイラスは、実在物と Chimeras を区別するためには、知覚される」とは独立な物質が存在すると言ふなくてはならぬと主張する。そこへ考へるに従つて、物質によつて産みだされているのが実在物であつ、そうでないのが Chimeras であるところに区別である。これに対し、非物質論者フィロナスは次のよう答へる。

あなたがあなた自身の考へに基づいてどんな方法によつて事物と Chimeras を区別しようとも、明白なのは、私の考へに基づいても、回りのとが成り立つだらうところです。といふのを、私の思つといふ、その区別は何らかの知覚された相違に基づかなくてはならぬ、そして私は、あなたが知覚してこぬのを一つたりともあなたから奪つていかないからです。 (Berkeley 235)

つまり、実在物（事物）と Chimeras を区別するには、結局のところ、知覚上の相違に依つなくてはならぬ。だとすれば、実在物と Chimeras の区別と云ふ点について言えば、物質があつてもなへても事情は同じである。この物質のようじ、あつてもなへても区別するが、ダイヤモンドの記述 fantasy である。そして、fantasy に惑われないフィロナスの姿勢が「実在的 精神」である。

哲学において経験論を探らずに実在的 精神を保つことがわめて困難だといつては、例えば、心身問題において行動主義を探らずに実在的 精神を保つことはきわめて困難だといつてある。なぜなら、行動主義とは一種の経験論（の徹底）であり、行動主義を探らなければ、心身二元論に舞い戻らざるを得ない。もつて思ふるからである。心身二元論は実在的 精神ではない。

なぜなら、心身二元論は「私的対象」として fantasy に感覚されるからである。

心身二元論が行動主義とちがうのは、形而上学的に隠匿されたものの存在を認める点である。その存在は、他人に到達不能という意味で、「私的対象」と呼ばれてしかるべきであろう (PU2-207)。しかし私的対象といつのは、その存在を仮定しても、何の機能も果たさない。それゆえ、私的対象は fantasy にすぎない。だとすれば、行動主義から心身二元論に戻つても事情は変わらない。行動主義によつて満たされなかつた事柄は、心身二元論という形而上学によつては満たされない。心的事象をめぐる諸問題に対処するためにもとめられるのは、誤つた「説」に代わる正しい「説」ではなく、「態度」という実在的精神性である。

例えば、眼前の喜びは真正か否かのような問いは、「喜び」の指示対象の有無を指摘することによつて答えられるのではなく、それに対する私たちの「態度」によつて答えられる。つまり、眼前的喜びが真正か否かは、それに対する私たちの「態度」のちがいに示される。私たちは、あるときは、眼前の喜びが真正であるかのようによるまい、あるときは、その喜びがいつわりであるかのようによるまい。その喜びが真正であるか否かといつのは、私たちがいづれの仕方であるまうか否かといつはとであつて、それ以上の」とではない。

あるときは、「私は痛みを有する」と私がAに言つて、「みんなにひどくはならないだらう」とAが答へたとす (PU 310)。そのとき、Aは、私の「痛み表現」が誠実に使用されていると信じてゐることを「態度」によつて示してゐるわけではない (PU 304)。自然音声と身振りによつて補われたAの答え「そんなにひどくはならないだらう」は、「私は痛みを有する」とAが信じていることを証明している。態度が信念を証明する。態度のちがいが信念のちがいになる。

このように説明すると、ウイートゲンシュタインは信念について行動主義を奉じてゐると反論されるかもしれない。しかし、信念は心的事象ではない (BP17156, Glock 623)。もし信念が心的事象であるとすれば、例えば、次の説明(e)は使用可能となるであろう。なぜなら、雨が降つてゐるという事実と私が特定の心的事象をもたないという事実が両立してしまつからである。

(e) 「雨が降つてゐるが、私は雨が降つてゐるとは信じていなご。」 (LT 117)

しかし「明(e)は自」に撞着を起してゐる。したがつて、説明(e)は使用する」とはできない。説明(e)が使用できないのは、信念

が心的事象ではないからではないか。だとすれば、信念についてではウイートゲンシュタインは行動主義者だと云う非難は当たらぬ。

ともかく、心的言明「私は痛みを有する」について、Aがその通りだと信じるか否かは、態度に示される。そして、その際に重要な役割を果たすのが、先に述べた「状況」である。すなわち、私が「私は痛みを有する」と言明したとして、Aが、私を介抱しようとするような態度をとるか、私のことを心配するような態度をとるか、あるいは、私に対し疑惑な態度をとるかは、その言明が使用される状況に大きく依存する。

行動言明についてではあるが、『探究』に次のよろな例が挙がっている。「彼の具合はどうかね」と医者が尋ねたのに対し、「彼は呻いています」と看護婦は答える。そのとおり、両者は、「私たちは更に彼に痛み止めの薬を与えるなくてはならない」と結論づける (PU5-179)。しかも両者は「媒概念を表明する」となしに」ただちにそつ結論づける (ibid.)。

前提1 「彼は呻いています」

前提2 (媒概念)

結論 「私たちは更に彼に痛み止めの薬を与えるなくてはならない」

五 結語

ウイートゲンシュタインは、「内的—外的」と云う概念枠組みを行動主義と共にしない。また、行動主義は、たとえ可能であつたとしても、痛みを伴つぶるまいと痛みを伴わないぶるまいのちがいが区別できない。そこで、ウイートゲンシュタインは、心的用語は何も指示しないと考えた上で、ダイヤモンドの言ふ「実在的精神」で、行動主義にも与せず、心身二元論にも舞い戻らない道を探つていった。たしかに、ウイートゲンシュタインは、自らの仕事は哲学的文法 (PU 371, 11-222) だと任じていたのか

この状況では、「彼は呻いています」という行動言明について、呻きが真正か否かとが、「呻き」が何を表しているかとかは検討される」とはない。やむまいの記述から媒概念を経ずに直ちに結論が導かれ、両者は患者が痛みを有する」とを信じる。」のよう、行動言明がどのように信念に影響をおよぼすかは、その行動言明がなされる状況に依存する。とりわけ、ノハリでは、両者が「行動記述に担当している役目」が重要な役割を果たしている (ibid.)。ノハリした「状況」は見逃されがちであるが、言語ゲームには「暗黙の前提」がつきまとつてある (ibid.)。同じことは、行動言明のみならず、「彼は痛みを有する」のよくな心的言明についても言えるであろう。

もしれない。しかし、心的用語の哲学的文法についての思索に際して、（アンチテーゼとしての）行動主義に対する意識が大いあづかって力があつたのではないだろうか。

、注

(1) ウィトゲンシュタインのテキストについては、【探究】第一部は節番号、第二部は節番号と頁数を、「数学の基礎」は何部の何節かを、「心理学の哲学」は卷数と節番号を、「断片」は節番号を、「最終手稿」は卷数と節番号（第一巻）あるいは頁（第二巻）を、他は頁を記した。なお、引用文中の「」は読みやすいように筆者が補つたものである。略号については、左記の文献表を参照。

(2) 支配階級が、非支配階級には学べない言語を使うことによって、自分の感情を隠すことも可能だらう」(LS2-379)、人々が、書かれた計画書を隠すことによって、自分の意図を隠す」といふである (LS1-949)。

(3) 原文は三人称であるが、議論の統一のために一人称に変えた (BP2-5386)。

(4) 規則に従う」と規則に従っていると信じる」とが異なるとウィトゲンシュタインは言う (PU 202)。規則だけでなく、説明についても、そのことは言えるのではないか。説明であることと説明であると信じる」ととは異なる、と。

(5) 以上の話は主として『心理学の哲学』に基づく。」)のウィトゲンシュタインの見解は、『最終手稿』に至ると、さらに明確になる。第一に、「形而上学的隠匿」は、単に根拠を欠くのではなく、論理的に不可能であるとされている (LS2-35)。第二に、内的世界が形成せざるを得ないことが、示唆されるのではなく、明言されてくる。「人間を前提するかぎり、内的なものも前提」せざるを得ない、と (LS2-84)。

(6) 小論では、感覚、心理、思考を一括して心的事象として論じた。三者は必ずしも同種のものとして論じられるわけではない。例えば、「痛みは、」の感覚印象と、かなり多くの仕方で類似しており、かなり多くの仕方

で異なるといふ」(BPI-896)。小論の話は三者の相違という問題に抵触し

(7) 「私は痛みを有する」という表現は日本語としてはたしかに不自然である。それでもあえて直訳したのは、その方が、「痛み Schmerzen」が何を指すのかという問題を及ぼやすくなるからである。

(8) 反対在論的意味論のためのみならず、他我についての懷疑論と闘うために、ウイートゲンシュタインは「規準 Kriterium」概念を導入したと言われるが (Glock 95)、彼の規準概念は、統一的に把握するのが容易でなく、小論で扱つたとはやきなかつた。ただ表題がなされた「状況」について論じたところでは、「規準」のアイデアを多少取り入れたつもりである (BB 24,27,69)。

(10) 表現は、「けつして二元論を前提するものではなく、先に述べた「文法的
フィクション」と解すべきであろう。

文脈から推して、医者と看護婦のここでの結論は、「もし彼が呻けば、私
たちは更に彼に痛み止めの薬を与えるなくてはならない」(PU5-179)とい
う仮言命題ではなく、「私たちは更に彼に痛み止めの薬を与えるなくてはな
らない」という命題になろう。

文献表

Berkeley,G, *The Works Of George Berkeley* (Edinburgh 1948-57) Vol.2.

Diamond,C, *The Realistic Spirit: Wittgenstein, Philosophy, And The Mind* (The MIT Press 1990)

Glock,Hans-Johann, *A Wittgenstein Dictionary* (Blackwell 1996)

Hacker,P.M.S, *Wittgenstein: Mind And Will* (Blackwell 1996)

Koethe,J, *The Continuity Of Wittgenstein's Thought* (Cornell University 1996)

Wittgenstein,L, *tractatus logico-philosophicus* ([*逻辑哲学论*])

—— *The Blue Book* (BB)

—— Ursache und Wirkung: Intuitives Erfassen (*Philosophia* vol.6 1976) (UW)

—— *Bemerkungen über die Grundlagen der Mathematik* ([*数学基础*]) GM

—— *Philosophische Untersuchungen* ([『迷狂』] PU)

—— *Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie* ([『心理學の哲學』] BP)

—— *Zettel* ([『墨』] ZI)

—— *Letzte Schriften über die Philosophie der Psychologie* (Blackwell 1982-92) ([『最終十編』] LS)

—— *Letters To Russell Keynes And Moore* (Oxford 1974) (LT)

—— *Letters To Russell Keynes And Moore* (Oxford 1974) (LT)
(なんだいたかお 近畿大学「非常勤講師」)